

## 令和2年度第11回アーバンデザインセミナー実績報告書

### 1. 開催日時

令和3年1月13日（水） 18時00分～19時30分

参加人数: UDCBK での視聴: 3名、オンライン: 18名=計21名

※オンライン会議システムとUDCBKのオープンスペースでの視聴を併用

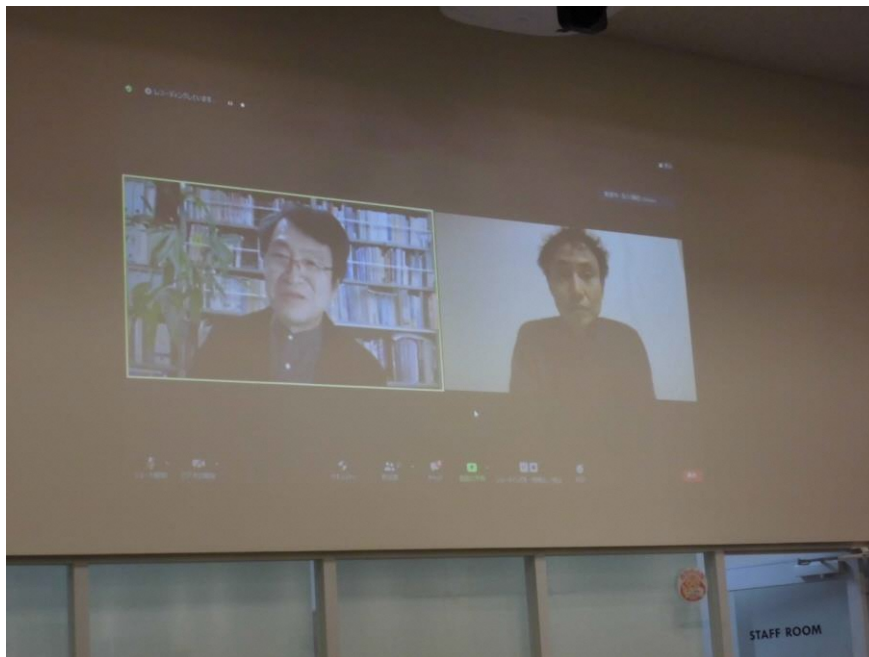
### 2. テーマ

「開かれたまちづくりの場 アーバンデザインセンター」

- 本セミナーでは、2018年に出版された『アーバンデザイン講座』（彰国社）の著者の一人である前田英寿氏を講師に迎え、UDCBKセンター長である及川清昭氏（立命館大学理工学部特命教授）のコーディネートのもと、「アーバンデザインセンター」の在り方について考えていく。

### 3. 話題提供者

- 前田 英寿 氏  
芝浦工業大学 建築学部 教授



#### 4. 話題の概要

##### 前田氏による講演

##### ア. アーバンデザインセンターの概要

- アーバンデザインとは、一言で言えば、専門家が行うまちづくりのことである。
- アーバンデザインのためには、多様な人やものが関わってくる、そういった中で調和のとれた都市空間をつくるためには、集団で何かを行う必要がある。
- 横浜市のような先進自治体では、役所の中にアーバンデザインの専門部署を設け、総合的な政策を実施していた。また、まちづくり協議会による合意形成、マスターアーキテクトやガイドラインによる協働設計といった方法も 20 世紀後半の調整型アーバンデザインの一例である。
- こういった異なる事物をコーディネートして都市空間をつくるという 20 世紀後半のアーバンデザインでは、課題も明確であり、市民や行政、企業といった主体同士の関係もはっきりしていた。
- しかしながら、21 世紀前半の現代においては、都市における問題（環境や経済、福祉など）が錯綜しており、課題に対処するというよりは、課題を発見しながら、試行錯誤しながら進んでいく集団的創造が求められている。
- そのためには、従来のようなアーバンデザインではなく、各主体が開かれた場においてみんなで参加・議論し、実験をしていく連携型のアーバンデザインが必要になり、そのための場がアーバンデザインセンターである。
- そのような場においては、市民・行政・企業といった従来の参加者に加えて、都市に関わる専門家や、離れた視野でものを見る学術機関、利害を超えて色々なものをつなぐ地域の NPO といった主体の参加も必要になる。

##### (ア) 日本のアーバンデザインセンター

- 日本で最初に「アーバンデザインセンター」を掲げたのは、「柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)」で「柏の葉キャンパス駅」のまちづくり組織として 2006 年に設立された。
- 当時、周囲がまだ開発段階にあった時に、先行的な組織として単独棟とともにつくられた。街区に何もなかった段階から現在まで周囲の開発が進み、現在はその街区の建物の一部に入居するかたちとなっている。
- 2006 年当時から 2020 年現在まで、アーバンデザインセンターは増え続けており、その数は 21 にのぼっている。また、アーバンデザインセンターイニチアチブという団体も設立され、センター相互の交流等を行っている。
- 21 のアーバンデザインセンターの立地を見ると、新しく開発を進める新市街地に立地するものが 3 つ、昔からある旧市街地や中心市街地に立地するものが 7 つ、住宅団地・大学キャンパスが各々 2 つ、また地域を限定せず県や市全域を対象とするもの

が4つ、研究ベースのものが3つとなっている。

#### (イ) アーバンデザインセンターの定義

- アーバンデザインセンターの定義は最初から確立していたわけではなく、UDCK の活動を試行錯誤する中で定まってきた。
- 定義ができる契機となったのは、UDCK の初代センター長である東京大学の故・北澤猛（きたざわ・たける）教授が研究計画を残されていたことであり、そこにはアーバンデザインセンターの目的と期待される成果として以下のことが記されていた。

目的: 都市の空間計画を進める場

期待される効果:

1. 市民組織や企業及び行政が共有できる空間計画とその策定プロセス
  2. 専門家（その集団やネットワーク）の役割と展望
  3. 計画やその長期的実現に必要な組織や拠点施設のあり方
- このメモをもとに、北澤教授の仲間や教え子など総勢30名が、アーバンデザインについて寄稿した内容をまとめた本が『アーバンデザインセンター 開かれたまちづくりの場』（2012年）である。
  - その本をまとめるに当たり、アーバンデザインセンターの定義ができあがっていったが、まず、アーバンデザインセンターとは「開かれたまちづくりの場」ということである。そして、メモにある期待される成果から、1. 連携による空間計画、2. 専門家の主導、3. 拠点と見える化、をその定義として導いた。

#### イ. アーバンデザインセンターの定義 1 「連携による空間計画」

- アーバンデザインセンターは「センター」と呼ぶように、対象地域の関係者全てに開かれた常設機関である。

#### (ア) 公民学連携（トラス）体制

- 連携とは、「公」、「民」、「学」の3つの主体によるものを指す。例えば、柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)では、「公」は、柏市、町会連合及び柏商工会議所、「民」は、三井不動産及びつくばエクスプレス、「学」は、千葉大学及び東京大学である。

#### (イ) 持ち寄り型と所属型の組織

- 公民学の連携には2つの型（「持ち寄り型」と「所属型」）がある。
- UDCK は持ち寄り型であり、自治体や企業、大学などの構成団体が事業や人材、資金などを持ち寄り、アーバンデザインセンターを構成している。コアの部分は小さいが、構成団体がいろいろなものを持ち寄るので、活動が広がっていく。新都市建設や市街地の再開発など目的がはっきりしている面的な事業地域に適している。

- もう一つの所属型は、都市再生法人やまちづくり会社など地元団体に付属するかたちで設立され、そのアーバンデザイン部門を担う。典型例は、松山アーバンデザインセンター(UDCM)である。こちらの型の特徴は、親組織がしっかりと存在するので、人材や資金が比較的安定していることである。一方、親組織の意向がダイレクトに反映されるので突如廃止されるということもあり得る。また、地方都市や既存市街地のように課題が多岐にわたり長期に取り組む地域に有効である。

#### (ウ) 空間計画の共有と実行

- 空間計画とは、都市や地域、まちづくりの計画を指す。
- 柏の葉キャンパスは、鉄道の沿線開発と一体化したまちづくりであった。しかし、周辺の土地をすべて一括で買い上げたニュータウン開発ということではなく、それぞれの土地に事業者や各地権者が存在していた。よって、まちづくりに当たっては、それぞれの主体が持つ思いや計画に、一つのベクトルをつけるということが重要であった。
- そのベクトルをつけることを担ったのが柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)であり、それぞれの思いをまとめたものが「柏の葉国際キャンパスタウン構想」である。
- この構想は、2008年5月に、千葉県・柏市・千葉大学・東京大学によって連名で公表され、その後、UR都市機構、三井不動産も加わり、現在まで実行されている。
- この構想自体が、アーバンデザインセンターと同じような公民学連携の構造を持っており、それぞれの主体が持つ計画を集めて、キャンパスタウン構想としている。
- 2006年下半年期からこの構想の調査を開始しているが、構想をつくるためにUDCKを結成したという側面がある。その後、現在に至るまで、UDCKはこの構想の実行に当たっての事務局を担っている。
- 最初は、手探りの状態であったが、シンポジウムや社会実験などを行っていく中で、公共の事業や民間のプロジェクト、大学の研究開発が結集されたまちづくりを行っていくということを、UDCKはキャンパスタウン構想を通じて証明していった。また、UDCKの存在理由をキャンパスタウン構想の中に確立していった。
- まちづくりを担うアーバンデザインセンターとその空間計画が公民学の連携という相似の構造であるということは重要なことである。新たにアーバンデザインセンターができるところや、それを維持しているところ、また上手くいっているところは、どこも、アーバンデザインセンターが依拠する、一心同体となる空間計画を持っている。その計画があることによって、アーバンデザインセンターが内外に確立していく。

#### (エ) 柏の葉国際キャンパスタウン構想

- キャンパスタウンとは、大学とまちの境界がなく、融合していこうとすることである。

空間的な融合とともに、大学の活動が地域に出てくる、また、地域が大学の研究開発に協力する、そういった大学やまちを目指そうという意味が構想のネーミングには込められている。

- 構想には、環境、産業、学術、移動交通、ライフスタイル、エリアマネジメント、都市空間デザイン、イノベーションの8つの目標が掲げられている。これらはハードにとどまらず、ソフトの面も含まれている。
- それぞれの目標には、各主体の計画を紐付けている。キャンパスタウン構想は独立したのではなく、それぞれの主体の計画を集め、一つのベクトルに合わせたものである。
- 各事業が動くことで、構想自体も動く。また、事業には国家的なプロジェクトも含まれており、いろいろなものが派生していく、オープンエンドな構造となっている。
- 構想には、実勢にあたっての定量指標（世界的研究・教育機関10誘致や通常開発比CO2 35%削減など）を掲げており、このことによって国家的な補助事業や社会実験も行われるようになり、それらの事業と協働することで数的な目標も明らかになっていった。

#### ウ. アーバンデザインセンターの定義 2 「専門家の主導」

- 計画や設計に関わることであるので、デスクワークは当然のことであるが、専門家には、それ以外にも関係者を牽引し一つの方向にひっぱっていく力や直接関係のない人や関心を持たない人にも情報を発信し巻き込んでいく力が求められる。
- 大学での都市デザインの教育には、各地でまちづくりを主導する人たちをお手本として見せながら、デスクワークとフィールドワークを兼ね備えた人材を育成することが重要になる。

#### (ア) コアとネットワーク

- 柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)では、コアの部分に専従の専門家3名と非常勤のスタッフがおり、その外側の構成団体である市や企業、大学からも担当者が非常勤のスタッフで加わった。また、プロジェクトに応じて、広報やイベントの専門家も参加した。
- コアは数名だが、それを支えるスタッフやプロジェクトごとの専門家がネットワークを結んでいった。コアだけでは活動は広がらず、ネットワークだけでは方向が定まらない。両者があって、UDCKの専門家集団が成り立つ。

#### (イ) 大学の貢献

- 大学と地域との関りにおいては、「サービスラーニング」という方法が一つある。これは、大学が地域のまちづくりやプロジェクトに対して技術支援を行う一方、地域は

大学の研究や教育に協力するというものである。

- 例えば、浦和美園において、地域から課題を出してもらい、それに対して学生が提案を行い、地域に成果を還元する都市デザインスタジオという実践がある。
- 関わりにおけるもう一つの方法は、「媒介」である。これは、市民や行政、企業など利害が異なる主体の中に大学が入って、ファシリテーションを行ったり、意見を整理したりする役割を担うことである。
- 例えば、学生がファシリテートを担うことで、利害が対立してしまう主体同士の中にワンクッションを入れられ、議論を他の主体にもバックさせることができる。

#### (ウ) 教育プログラム

- 子どもがまちづくりに関するプログラムに参加することで、その親や祖父母もまちづくりに参加する機会につながる。
- UDCK で行われている「ピノキオプロジェクト」は子どもの職場体験を通じて、まちに関心を持ってもらう取組である。
- また、UDCK の「まちづくりスクール」による多世代学習は十数年続いており、受講生だった学生がスクールの運営を担うなどの循環も起こっている。当初は、大学教師などによる講座が多かったが、徐々に双方向になり、社会実験になったものもある。
- 他にも柏の葉地域から探したテーマをもとにした複数の大学によるデザイン演習が行われた。また、デザイン演習の成果が地元の企業の協力によって実体化するという社会実験にもつながっていった。

#### エ. アーバンデザインセンターの定義 3 「拠点と見える化」

- アーバンデザインセンターは自らが活動する現地に拠点を置くことに特徴がある。
- 立地の形態としては、1. 既成市街地に立地する場合、2. 公共施設などの建物に入居する場合（例: UDCK）、3. 再開発地域の近くに立地する場合、4. 低未利用地に立地する場合、がある。

#### (ア) 都市博物館 Urban center

- ヨーロッパの都市にあり、都市情報（都市模型やパネル展示など）と交流機会（講座やワークショップなど）を提供する施設である。ほとんどの施設には、運営スタッフがいます。都市や観光の案内を兼ねることもある。
- パリの Pavillon de l' Arsenal は、かつての歴史的建造物を都市博物館に転用し、その保全も兼ねて、最新の都市に関する情報を市民に伝えている。
- アムステルダム Architecture center は、セミナー室や運営スタッフの事務室が充実しており、いろいろな研究活動や出版活動が行われている。

(イ) 地域再生拠点 Local center

- まちづくりの活動自体を起こしていく、都市に働きかける発動体としての役割を担う。
- 海外では、あえて貧困地区などに地域再生拠点を置いて、再開発を起こしていくことがある。
- 日本では、愛媛県の松山アーバンデザインセンター(UDCM)が、繁華街である銀天街近隣に立地していた当時、銀天街の再開発の情報を発信したり、市民の声を集めたりする機能を担っていた。
- 福井県のアーバンデザインセンター坂井(UDCS)は、歴史的地区にある町家を改修した建物であるが、地域に入って地区の歴史を保全活用する拠点となっている。

(ウ) 開発情報拠点 Project center

- 都市の大規模開発事業などが行われる際に、事業の情報を公開するために設置される施設である。
- パリの左岸再開発情報センターは、鉄道コンテナハウスを再利用した建物で、鉄道ヤードの再開発のための開発情報拠点である。この施設には市民の他に、地域を再開発する事業者や開発業者に向けても、どのようなまちができるかをアピールする目的がある。
- ドイツのハンブルグにあるハーフェンシティの再開発では、まちに世界遺産があるため、観光客が開発情報拠点に立ち寄る。それゆえ、ガイドツアーや観光案内の機能も有している。

(エ) 専門支援窓口 Architecture center

- 地域の建築都市環境の質向上に係る専門家の窓口として機能している。
- 例えば、建築が都市に与える影響を評価するデザインレビュー(景観審査)を実施したり、市民に建築の専門家を派遣し支援するデザインイネープリングを行ったりしている。
- 米国などでは、建築家協会に代表される職能団体がその機能を担っている。
- 日本では、海外のようにシステムチックに専門家が派遣されるという段階にはなっていない。今後、そのような機能が発揮されると、よりレベルの高い成果が実現される可能性が高まり、専門家にとっても仕事の枠が広がることが期待される。

オ. 清水みなとまちづくり公民連携協議会

- 1980年代の「ウォーターフロント開発」は港を都市化する動きだった。
- 1998年に中心市街地活性化法ができた頃、港湾の側からも「みなとまちづくり」という言葉が出てきて、みなととまちのwin-winの関係を築こうということになった。

- その後、2011年に東日本大震災が発生したことにより、港の機能を強化し、港湾からの地域再生を図ろうという「新みなとまちづくり」という構想が生まれた。
- 2018年に都市・港湾行政、港湾事業者、金融・交通機関、商工会議所、学術機関などから成る清水みなとまちづくり公民連携協議会を設立し、2019年に産業と市民の共存を目指す、清水みなとまちづくりランドデザインを発表した。
- 計画を進めるに当たっては、どこに何を配置するかという空間計画が重要になる。
- 柏の葉アーバンデザインセンターは首都圏なので、ヒトやお金の流れもあるので比較的スムーズにプロジェクトを進めることができる。しかし、清水のように地方には、そのような資源はない。その中で、どのようにアーバンデザインセンターを立ち上げるかは、他の地域にとっても汎用化できる技術として期待できる。

## 5. 質疑応答

(1) Q: 清水にはアーバンデザインセンターがつくられるのか。

A: アーバンデザインセンターという冠をつけるかどうかは未定である。今使っている「みなとまちづくり」という言葉を前面に出してやっていきたい。機運が高まれば、全国のアーバンデザインセンターの一員になるという期待もある。

(2) Q: 柏の葉アーバンデザインセンターにあるオープンスペースは日常的にどのような使われ方がされているか。

A: 設立の初期は、キャンパスタウン構想における会議等で使用していた。その後は、手続を踏むことで市民団体等がイベント開催時に使えるスペースとして貸し出すことにした。

(3) Q: 「清水みなとまちづくり」では銀行とどのように連携しているか。

A: 港は産業の場であるので、当初から地元の経済団体が参画することは決まっていた。現在は、静岡銀行と清水銀行の2行が加わっている。

(4) Q: 「アーバンデザイン」ではなく「空間計画」という言葉があえて使われている理由は何か。

A: 「アーバンデザイン」という言葉は、色々なところで使われるようになってきているが、その中心は「よい空間をつくっていく」ということにあると考えられる。よい空間が市民活動を促したり、地域の価値になっていったりする。よって「空間計画」＝「アーバンデザイン」と解釈することができる。

(5) Q: 企業と住民、他のプレイヤーが最初からオープンに話すのは難しい気がするが、どうやって彼らの垣根を小さくしたのか、苦労した点、工夫した点など教えてほしい。



A: 柏の葉は、新しいまちだったので、当初は町会や公民館などが存在していなかった。よって、その機能の代わりにアーバンデザインセンターが果たしていた。こちらが来てくださいますと言わなくても、むしろ、住民の側からどんどんと来てもらっていた。清水は、昔からあるまちなので、住民を巻き込むといったことが難しい部分もある。

(6) Q: アーバンデザインセンターのミッションは、プロジェクトベースのもの（UDCO など）と、地域マネジメントを主眼にしているケースがあると思うが、どちらに重きを置くべきと考えられるか。

A: 両方をミックスするのが良いと考えられるが、現状は地域マネジメントのニーズが高いと思われる。ただ、そのマネジメントの中に小さなプロジェクトを散りばめたり、行政のプロジェクトを引き込んでいったりすることも考えられる。小さくても何か目に見えるものができると求心力が高まる。

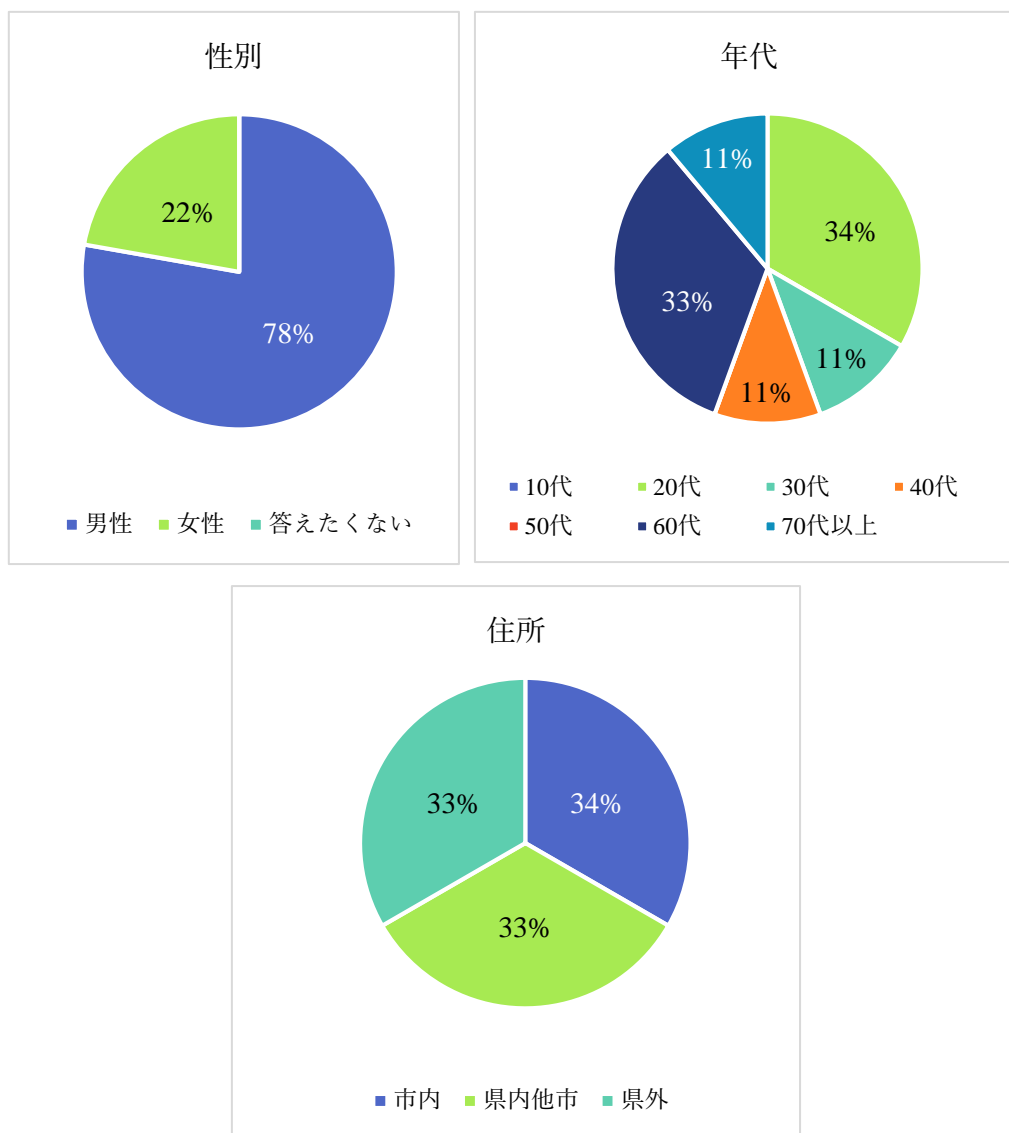
## 6. まとめ

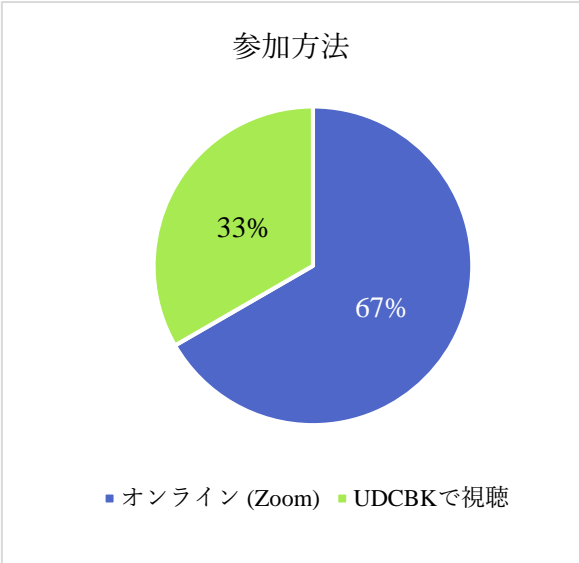
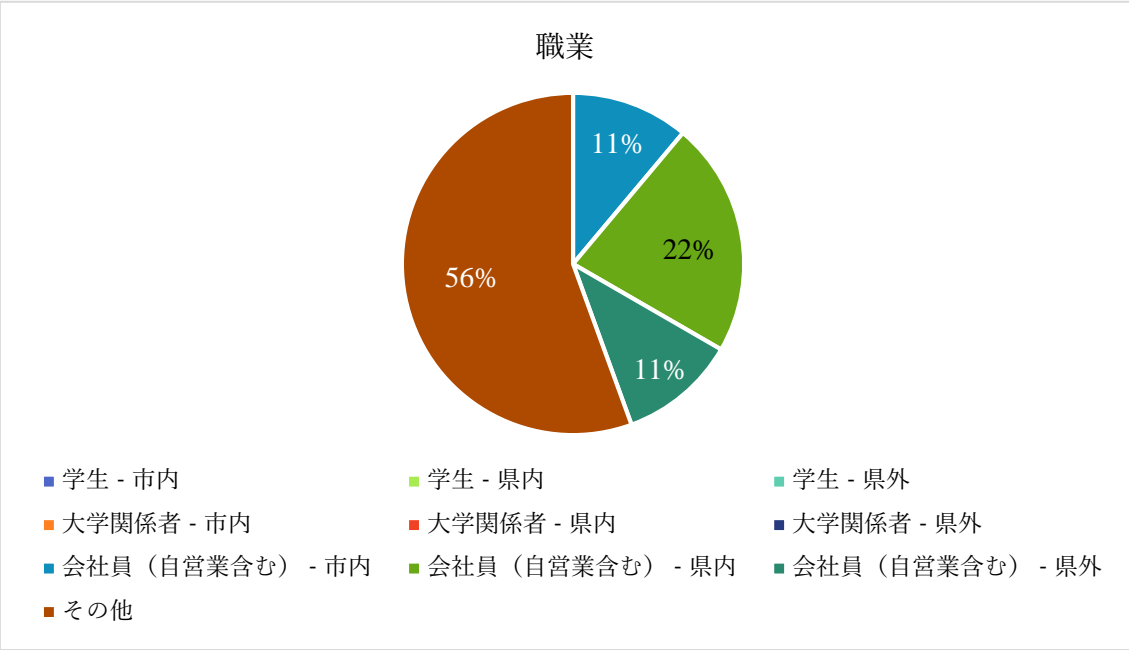
- アーバンデザインセンターの定義（1. 連携による空間計画、2. 専門家の主導、3. 拠点と見える化）自体が、柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)の設立から実践に至る過程で、試行錯誤の中から徐々に定まってきたものである。
- 依拠すべき空間計画を有しているアーバンデザインセンターは、総じて、その運営が軌道に乗りやすい傾向にある。計画があることで、内外にアーバンデザインセンターが確立していく。
- アーバンデザインセンターは、開かれたまちづくりの場であり、そのコアには専門家がいながらも、コアの周りには多様な主体がネットワークとして存在している。そして、コアとネットワークの相互が関係し合うことによって、方向を定めながら活動を広げていくことができる。
- アーバンデザインセンターの拠点は、その活動を実践する場に置かれ、地域に「見える化」されている。そして、その形態は地域の抱える課題等によって異なる。日本では海外にある「専門支援窓口(Architecture center)」のような機能が発展途上にあり、地域の建築都市環境の質向上のために、その機能を充実させていく必要がある。
- 小さくとも何か目に見えるプロジェクトを実行していくことにより、アーバンデザインセンターの内外で成果を実感することができ、産学公民の連携も進んでいく。

## 7. アンケートまとめ

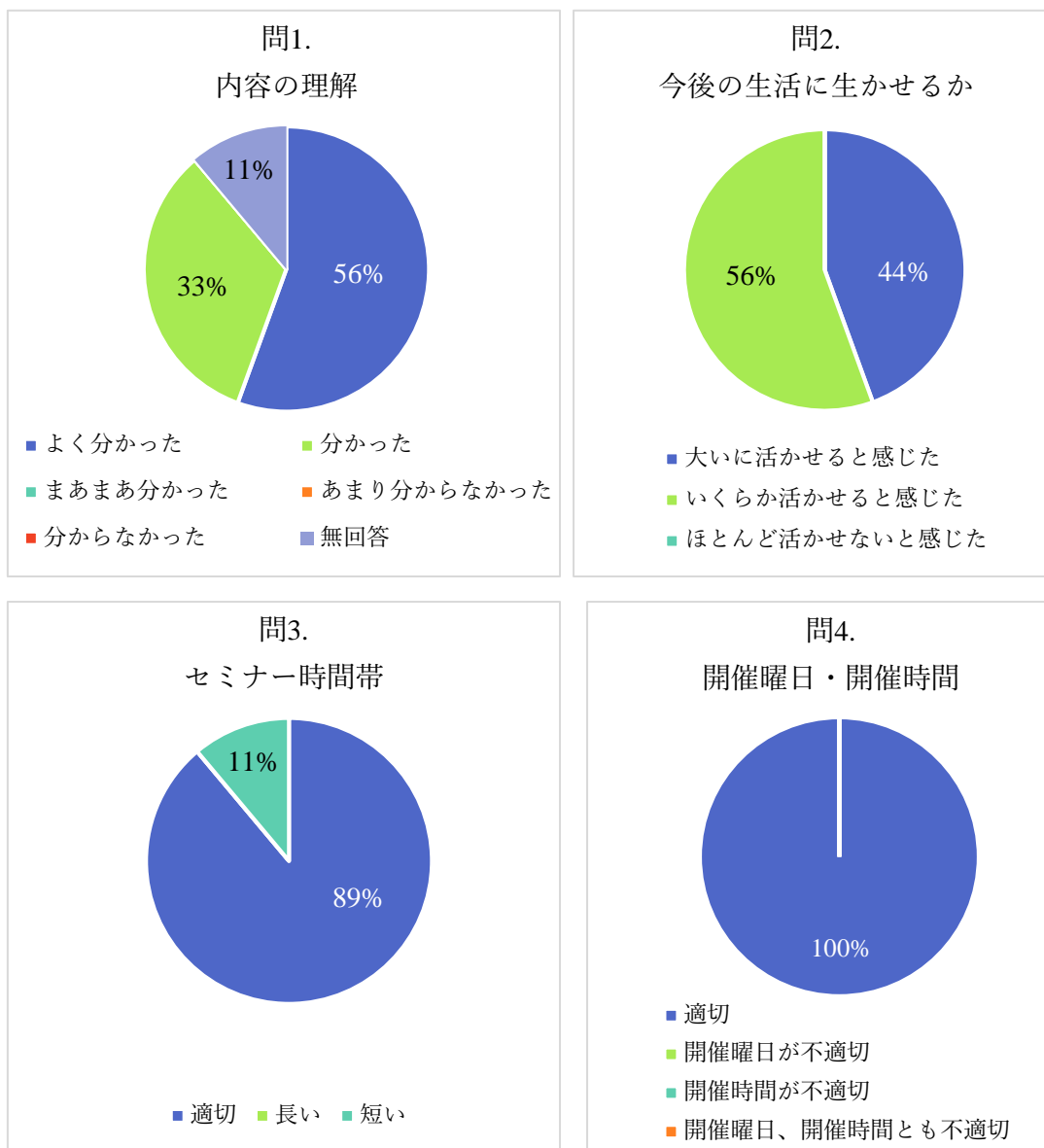
### (1) 参加者属性

参加者 21 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 9 名、回答率は 43% だった。





(2) 内容について



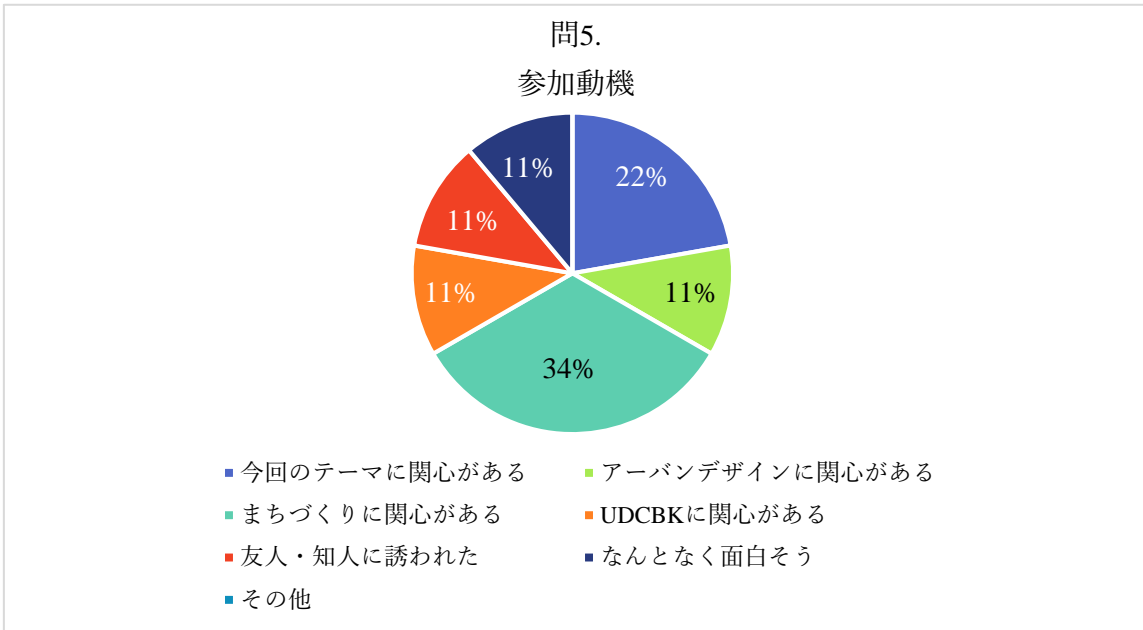
【自由記入欄回答】

問3. 時間はどうでしたか。

- 短い（適切な時間を記入ください）（2時間位で）

問4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



【自由記入欄回答】

問6. それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- UDCにて実際行われた対話の内容（どのような立場の人が、どのような意見をもって対話したか）（20代女性）
- まちづくり全般、脱炭素社会、気候変動など（60代男性）
- UDCの理念や役割、具体的な活動内容など。（20代男性）

【自由記入欄回答】

問7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 「UDCは自ら活動する現地に拠点を置く」ということ。事業のやりやすさ等を考えると、庁舎やオフィス街に拠点を設けたくなくなってしまうと思うので、とても大事なことだと感じました。（20代女性）
- 関係団体が幅広く参画するところ（アーバンデザインの参画者）（20代男性）
- 先生の著書を読んで勉強しようと思います。歴史的なことも大事だと感じました。（60代男性）
- 細かいこといろいろ聞きたいのだけど、短い質問時間では難しい。今回のような内容だと終了後の交流会とか欲しいですね。（60代男性）
- 内容、説明等、全て、大変印象に残った。理由は、普段より様々、アーバンデザインセンターの企画に参加させていただいているが、「アーバンデザインセンターの定義」

といった根本的な考え方、とらえ方など、分かりやすく説明していただいたことで、改めて、アーバンデザインセンターの存在や活動の意義を再確認することができたから。(60代女性)

- アーバンデザインセンターの成り立ちを時代背景とともに解説いただいたことで、理念や役割など容易に理解することができました。また、役割の一つである「連携による空間計画」についてもキャンパスタウン構想という具体的な構想を出して説明いただき、連携に至るまでの経緯がわかりやすく、勉強になりました。(20代男性)
- UDCK が新しく作られた街だからこそ、住民の参画に繋がったというのはとても興味深い話でした。清水みなとまちづくりの活性化が実現したら、ぜひその苦労や工夫のお話をお聞きしたいなと思います。(30代男性)